

事業実施報告書

法人名 特定非営利活動法人チーム東松山

事業名	「被災地」をつなぐ「復興」リノベーション事業
助成事業の種類	SDGs推進事業・平和分野
1. 事業の目的	<p>令和元年東日本台風の「被災地」、東松山市早俣地区と葛袋地区では、被災者自らが「つながりの再生」を合い言葉に地域コミュニティ再生の活動を始めつつある。今回の事業は、早俣地区で被災した納屋をリノベーションして「語り部カフェ」を開催したいという「て to て」の住民の活動を大学生のグループとともに側面的に支え、葛袋地区では被災した子育てサークル宅にて子どもたちの防災デイキャンプを開催し、それぞれの地域の実情に応じた「復興」を後押しするための事業を進めることとした。</p> <p>なお、早俣地区と葛袋地区の住民相互の交流に加え、東日本大震災以後、災害ボランティア活動等をきっかけに「友好都市」となった宮城県東松島市の住民との交流も深めながら、それぞれの「被災地」をつなぎ、それぞれの地域の「復興」をカタチにする事業を行うこととした。</p>
2. 事業で取り組んだ地域や社会の課題	<p>東松山市の早俣地区は、90 世帯ほどが床上浸水し「全壊」の扱いを受けた地域である。公費で被災家屋を解体し新築したお宅もあるが、多くはリフォームで生活再建を目指している地域だ。二重ローンの世帯も少なくなく、他地域へ移住した方もいる。そのような現状のなかで、任意団体「て to て」を立ち上げた被災住民は地域コミュニティの再生を目指して「語り部」の活動をはじめ、自宅の納屋をリノベーションして地域再生のシンボルとしてのカフェ開業をめざしている。</p> <p>また、東松山市葛袋地区は 50 世帯が床上浸水し、大規模半壊・破壊の罹災判定が出た地域であり、やはり必要な修繕を行い生活再建に向けて動いている。</p> <p>2019 年被災直後から、両地区に友好都市となった東松島市の集団移転地区の住民が駆けつけて交流が始まり、両地区の被災者の方々も東松島市住民の訪問に勇気づけられ、昨年度は東松島市訪問も実現した。</p> <p>両地区の地域コミュニティの再生に尽力している「被災者」を側面的に支援することで遅れている「復興」を推進したい。</p>

3. 取り組んだ事業の具体的な内容・実施結果

- (1) 早俣地区でのリノベーションカフェ支援事業
リノベーション体験ワークショップの開催 全 10 回
令和元年東日本台風の体験についての「語り部」カフェ 3 回
都幾川源流部の森林見学ツアーと製材ワークショップ
コロナ禍の拡大もあり中止
- (2) 葛袋地区での防災キャンプ体験事業 1 回
- (3) 宮城県東松島市と早俣・葛袋をつなぐ交流事業 2 回
スケジュール

時期	
7 月	リノベーション体験ワークショップ準備
8 月	リノベーション体験ワークショップ 10 回
9 月	
10 月	交流事業 宮城県東松島市から 3 名招聘 語り部カフェ
11 月	交流事業 宮城県東松島市から 1 名招聘 語り部カフェ
12 月	防災こどもデイキャンプ 語り部カフェ
1 月	
2 月	

広報実績

当事業の内容を紹介するチラシ（A4）10,000 枚を印刷し、二地区および周辺地域に新聞折込を行った。また、東松山市と東松山市社協の協力により、各地区センター、図書館等にチラシを置く。コロナ禍もありケーブルテレビへの依頼は中止した。

4. 事業実施により達成した成果の具体的な内容

- (1) 早俣地区でのリノベーションカフェ支援事業
リノベーション体験ワークショップの開催 全 10 回
明治大学建築学科の学生たち 3 名（任意団体「ひととば」）により、10 日間のリノベーションワークショップを開催。カフェ化にあたり、必要な農機具（トラクター）の物置を外付けする作業を行った。氾濫した都幾川の上流部（ときがわ町）の木材を使うことで、河川の意義や役割、源流部の人々の暮らしぶりなど、語り部カフェ等で紹介することもできた。作業参加延べ 100 名。



令和元年東日本台風の体験についての「語り部」カフェ 3回
一回目は10月15日、宮城県東松島市の集団移転地区住民の方々との交流会と兼ねて、「語り部」カフェの第一回を開催。東日本大震災の被災体験から復興への歩みを東松島市の方々から伺うとともに、東松山市の被災地域の再生について住民を交えた意見交換を行うことができた。参加者34名

二回目は11月12日、「台風19号の被災体験を地域防災へ活かす」というテーマで開催。地区住民も含めて参加者20名

三回目は12月11日、「台風19号の被災体験を次世代へ繋ぐ」というテーマで主に大学生たち(9名)や地域住民とともに、これからどのように被災体験を伝えていくか、次世代の方々はどのような活動をしていくか意見交換を行った。



10月15日

11月12日

12月11日

(2) 葛袋地区での防災キャンプ体験事業 1回

台風19号で大規模半壊の被害を受けた子育てサークル「ポラリス」宅を使い、防災こどもデイキャンプを12月5日に開催。小中学生7名、大東文化大学防災サークルSTERAのメンバー6名が参加。室内で防災ゲームを体験した後、薪で火をおこし炊飯、カレー調理など行い、防災トイレの使い方などを学んだ。



防災カードゲーム 簡易トイレとソーラークッカー 炊飯

(3) 宮城県東松島市と早俣・葛袋をつなぐ交流事業 2回

10月15日、宮城県東松島市より3名の集団移転地区住民が来訪。移転元の農地で栽培したサツマイモを届けてくださったので、焼き芋をつくって参加者に振る舞う。東松山で被災した千代田さんとして「語り部」カフェも初体験。参加者34名

11月6日、宮城県東松島市野蒜ヶ丘の山縣さんをお招きして、災害直後に起こったこと、地域コミュニティ再生のお話を語っていただいた。参加者10名

<p>5. 費用面での工夫</p>	<p>猛暑とコロナ禍もあり、夏場のリノベーション作業は厳しいものだったが、複数の大学生の参加があり、コンクリート打設や物置設置までプロの手を借りずに建設することができた。ときがわ町の製材所をもつ若手職人の協力もあり、短期間で伐採した杉の木を使える状態まで加工してもらい、材料費も抑えることができた。被災者は災害後のリフォームで多額の出費があったので、今回のリノベーションは最低限の費用で実施することができた。</p>
<p>6. 地域社会への還元について</p>	<p>台風19号で被災した地域(早侯・葛袋)は高齢化も進み、大規模水害で人口の流出も若干あったものの、長期間支援した市役所や社協の後押しもあり、復興に向けた歩みが始まっていた。今回、その2地区において被災者自らが地域コミュニティの再生をめざし活動を始める動きがあったので、今回の事業により被災者の思いをカタチに変えることができたように思う。</p> <p>とりわけ、友好都市にもなった宮城県東松島市からの複数回にわたる「集団移転地区住民」との交流会は、災害に立ち向かう勇気と地域コミュニティ再生のエネルギーを獲得する機会になり、両地区の高齢被災者の方々も参加することによって、語り部カフェが地域再生の中核的な役割を果たすことができるようになった。</p>
<p>7. 来年度以降どう事業を継続し発展させていくか</p>	<p>来年度は、早侯地区「て to て」が単独で「語り部」カフェを企画運営することになるが、今年、焼き芋、焼き牡蠣(東松島市産)など飲食の提供を側面的に行ったことを踏まえて、彼らが行う活動の応援企画として継続的に地域コミュニティ再生のお手伝いを担っていきたいと思う。</p> <p>また、葛袋地区は、子育てサークルの拠点でもある「ポラリス」の建物や敷地(農地)を活用して、今後も市内の子どもたちと「防災デイキャンプ」や各種ワークショップを開催し、地域再生の役割を担えるように協力していきたい。</p> <p>また、両地区との住民の交流を踏まえて、昨年度より宮城県東松島市を訪問するツアー(スタディツアー、交流ツアー)も複数回開催しており、東日本大震災復興支援と台風19号被災地復興支援を並行して行いながら、防災・減災に向けた取組を推進するとともに、自然の恵みに感謝し謙虚に生きる暮らし方の実現に向けた取組も始めていきたい。</p>